随筆

内村剛介

村野 克明
むらの かつあき

一九七〇年代半ばの春先のこと、札幌大学のサークル会館の二階の通路から何気なく外を見ていたら傍らの友人がちょっと遠い所を歩いていく人を指さして「誰だか知ってるか、あれが内村剛介（本名内藤操）だぜ」と言った。ロシア語学科三、四年生対象の選択科目の「講読」で当時北大の先生だった内村氏は自分が翻訳したシニャフスキー（アブラム・テルツ）の『思わぬ閃き』の原文（**Мысли врасплох**）を教材に使っていた。興味本位にちょっとその授業を覗いてみたら、学生たちが大声でテキストの一節を朗誦していた。私は二、三度出たきりで何か「やばい」気がしてとんずらした。あとで同級生の一人が授業中に動物だか植物だかの名称の誤訳を指摘した。すると内藤先生いわく「日本語としてはこっちのほうがいいだろ」と（内心はどうだったかは神のみぞ知る）まるで負けていなかったそうである。

その後、大学を卒業して東京で就職してしばらくたった頃、早稲田の古本屋街で「寺子屋教室」のポスターを見かけた。そこの講師陣に内村剛介の名があった。ご本人がその界隈を歩いているのも目にした。で、札大でのことが「しこり」となっていたので、今度こそは一年間は出席してやろう、と高田馬場駅近くの「教室」で末席を汚した。生徒は五、六人で、内村氏はテキストを一人で朗読し自分で翻訳してみせる。おしまいに質疑応答の短い時間を置く。が、それでおわりの授業だった。輪読形式とはかけ離れた内村独り舞台。一方的に「業」を「授ける」という形式。怠けようと思えばいくらでも怠けられそうだった。が、私はとにかく「予習」は怠らなかった。自分の訳と内村氏の訳とをひそかに比較していたのだ。が、なんど「へえ、ここはこうやって訳すのか」と舌を巻いたことだろう。その時のテキストはセルゲイ・ブルガーコフの『英雄主義と苦行』（**Героизм и подвижничество**）だった。

授業にまつわる話はほぼ以上で尽きる。が、私がロシア語の書籍を販売する会社で働いていたことと、自宅が内村氏の家と比較的近所だったこともあって、その後も思い出はある。たとえば、内村氏が何歳か年下の私の母と言い争ったこと。その場にはロシア人の年輩の女性もいた。母がその女性に「（ロシアでは）年金はいくら貰ってるのか」と質問した際だった。内村氏が怒りだして「失礼だ、そんな質問をするとは」と直言すると、母も顔色を変えた。そしてややしつこくからんでいった。それから一年ほどの間は、私の顔を見るたびに「あの頑固じいさんは元気か」「あんな頑固じじいは今まで見たことがない」と母は繰り返すのだった。

私の両親はそもそも「アカの国の言葉をやるなんてとんでもない」という意見だった。が、まあロシア文学ならいいだろう、って感じでもあった。母は戦中の日赤の看護学校出身で「靖国の花と散る」愛国者。子供の頃に「私は満蒙開拓団に行く」と主張し小学校の先生にたしなめられた由。そこに満洲のハルビン学院出身でソ連の監獄で十一年も苦労を嘗めた「じじい」が出現したのだから、

内心は何か期するところがあったのかもしれない。が、「年金」でそれもすっ飛んだわけだ。その場に父はいなかったが、こちらは学徒出陣組で内地勤務。軍隊で同じ釜の飯を食った仲間に映画評論家の小川徹氏がいた。内村氏いわく「ふーん、君の親父は小川君の知り合いか」。内村氏も小川氏と付き合いがあったのだ。

さて、札幌大学では菱沼圭介、深水明美、バレンチナ松坂の諸先生が「満洲」と縁があった。噂では内村氏は菱沼さんの研究室に来ては二人で話し込んだりしたことがあったようだ。おそらくハルビンの話でもしていたのだろう。私が満洲や亡命ロシア人に対して関心を抱くようになったのもこうした「札幌大学」に淵源がある。（了）

付記

内村剛介、というと私にとって一番印象深いのはその翻訳作品である。『エセーニン詩集』（彌生書房、一九六八年刊）が素晴らしいが、ここでは、『現代ロシヤ抵抗文集3 シニャフスキー・エッセイ集』（勁草書房、一九七〇年刊）所収の『思わぬ閃き』から、以下、引用しておきたい。

――「ゆきずりの者からパジャルスタ（どうぞ）とかスパシーボ（ありがとう）とかいわれるときの気持ちのいいこと。このスパシーボをいうその言い方が、ほんとに救いをねがっているといわんばかりのしんからのものなのだ。世界はもっぱらこの心やりのゆえに保（も）っているのだ。とりわけロシヤの世界がそうだ。ブラトーク（きょうだい）、パパーシャ（とっつぁん）、ブッチェ・ドーブレンキ（あのね、おねがい）というこれといったこともないやつ。ごていねいなことはこれっぽっちもないが、そのかわり親身のイントネーションをもっているやつ。」(**Как это понятно, когда случайный прохожий говорит <пожалуйста> или <спасибо>. И говорит это <спасибо> с таким чистосердечием, точно в самом деле желает тебе спасения. На этой задушевности только и держится мир, в особенности – русский. Какое-нибудь <браток>, <папаша>, <будьте добреньки>. Безо всякой вежливости, но с родственной интонацией.**)

――「やっぱりこの世でいちばん好きなものは雪。」(**А всё-таки больше всего на свете я люблю снег.**)

――「読書も窃盗まがいだときたからには、ちっとばかりロマンチックな気分にならずにいられようか。」(**Уж если даже чтение книг – наподобие кражи, то как же не быть немножечко в романтическом духе?**)

――「神よみそなわせ――わしゃ酔ってるよ。」(**Господи, Ты видишь – я пьян...**)

――「われわれが何かの放射能で死ぬ運命にあるというなら、それは全くロジカルなことだ。思想というものは自分を殺す限界まで発展して行くものだ。だが、犬ころとか鶏とかに何の罪がある？発達を望みもしなかった彼らに？何の罪が？」(**Если нам суждено погибнуть от какой-нибудь радиации, это будет вполне логично. Мысль развивается до такого предела, что убивает себя. Но чем виноваты собаки, <u>лягушки</u> – те кто не хотел развиваться?**) 今、思いがけず見つけた次第だが、その昔わが学友が誤訳を指摘したという個所はここの下線部分であった。ここは明らかに「鶏」ではなく「蛙」(**лягушки**)。